

吉田芭竹創刊



令和三年(2021年)

二月号



公益財団法人
書壇院

公益財団法人書壇院は、書道の研究、教育及び普及に関する事業を行い、

書道芸術の高揚と精神の修養、人格の陶冶を図ることを目的としています。

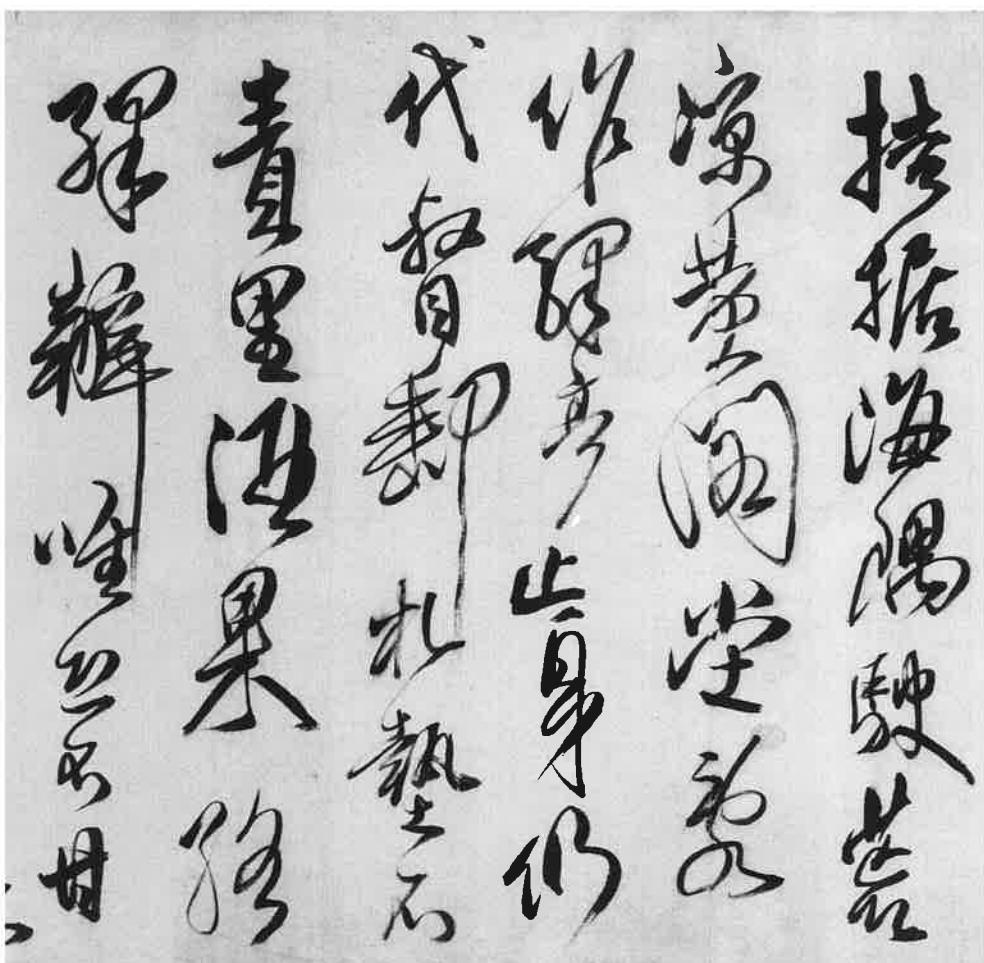


昭和四年三月十五日(第三種郵便物認可)
令和三年二月二日発行 刷納本
(毎月一回五日発行)

(毎月一回五日発行)

第九十四卷

第二二〇五号



拮 据 海 隅 駛 荒
涼 黃 閣 堂 亂
作 驛 亭 止 身 仍
代 督 郵 札 墊 不
責 里 酒 果 絡
繹 辨 唯 恐 不 甘

(漢字臨書規定 = 8頁)

課題 半切 = 荒涼より責里まで (二十字)
半紙 = 酒果絡繹辨 (五字)



カンダタ

「あつたてんがのう」に始まる昔話。小学校に入る前後、毎晩祖母に抱かれて眠り、昔話を聴いたものだった。高校卒業後だつたろうか。芥川龍之介のカンダタの小編に出逢った。祖母から何度も聴いた話で、つまらなかつた。

カンダタはお积迦さまの垂らした蜘蛛の糸をよじ登る。下を見ると大勢の亡者が登つて来る。これでは糸が切れてしまうと、カンダタが糸を切つた。と、自分もろとも地獄の釜の中に落ちてしまつた。芥川は自分をカンダタに重ねていたのかも知れない。

私には蜘蛛の糸が垂れて来なかつた。自分で糸を紡いで天に延ばすより手がなかつた。私の糸は書道の糸。糸を天上に延ばすのは至難の技、不可能なことであつた。あるとき、思いもかけず糸が垂れて來た。それに書道の糸を結びつけて必死に登つた。五十年近くも登つただろうか。その糸は中空で終わつていした。天は地獄から見たまま、はるかかなたであつた。風が強い。握つている糸は大きく揺れて停まることがない。そこに、有るか無きかのか細い糸が風に流されて近づくのが見えた。手が届かない。何としても届かない。もう疲れた。下を見たら地獄の釜がすぐそこにあつた。そこで一首。

書の道を むそとせかけて 越え越えて

来てみりや昔の 地獄にぞかし

エツ、もしかしてここは天国か。

佐藤瑞雲書

—良寛詩—

鳥巢喬木顛 黃雀聚飛株
憑弋鳥護鳥此物猶尚爾
兩箇通互扶 如何其為人
如此相誅一 (良寛の名詩選)

如何爲人彼也爲わ誅 端毛書

鳥巢喬木顛 黃雀聚飛株
憑弋鳥護鳥此物猶尚爾
兩箇通互扶 如何其為人
如此相誅一 (良寛の名詩選)

平岡東澤書

—王維詩—

已見寒梅發復聞啼鳥
愁心視春草畏向玉階生

已見寒梅發復聞啼鳥
愁心視春草畏向玉階生
(唐詩選通解)

同人参考手本 半紙 一競書の参考としてご活用下さい

鳥啼花未落人静月同眠



柴田笙書



有賀竹秋書

白雲や花よりうへにかかるらむ桜ぞ高き
らきの山



林和子書



丸川瑞江書

同人参考手本

2尺×6尺額用

富田幽蒲書

李白詩

白雲南薰殿。赤紅北斂帷。
 不惟風急走羸沙。亦有雌霓歸。

素女鳴珠佩。天人弄綵毬。
 今朝風日好。宜入未央宮。

(中国詩人選集) 用紙 紅星牌單宣玉版
 筆 和筆 長鋒二号

鳥海紅蘭書

玄宗皇帝詩

劍閣橫雲峻。鑾輿出狩回。
 翠屏千仞合。丹嶂五丁開。
 灌木繁縝轉。仙雲拂馬來。
 乘時方在德。嗟爾勒銘才。

唐詩選詳說

用紙 特級箋
 筆 和筆 長鋒三二号

(唐詩選詳說)

劍閣 橫雲 峻 鑾輿 出狩 回 翠屏 千仞 合 丹嶂 五丁 開。
 灌木 繁縝 轉 仙雲 拂馬 來 乘時 方 在德 嗟爾 勒銘 才。

二月五日締切（楷書）

漢字規定

半紙縦書

上位・準上位課題

勝作一書生

從軍行

楊炯

烽火照西京

心中自不平

牙璋辭鳳闕

鐵騎繞龍城

雪暗凋旗畫

風多雜鼓聲

寧爲百夫長

勝作一書生

り

玄位～六位課題

旗指西南歸

（旗は西南を指さして帰る）

旗はわたしが帰る西南をさして
いる。（梅堯臣詩より）

参考手本 玄位～六位 江川蒼淵書

え がわ そう えん



旗 方は少し左へ寄せる。
指 旗よりも小振りにする。

西 タテ画の四本は中心の方向へ。

南 大きくなりやすいので注意。
歸 偏が幅を取りすぎぬこと。

二月五日締切

かな規定

半紙縦書

極位・準極位課題

水のおもに あや吹きみ
だる 春風や いけの氷を
けふはとくらむ

(紀友則)

妙位～6位課題

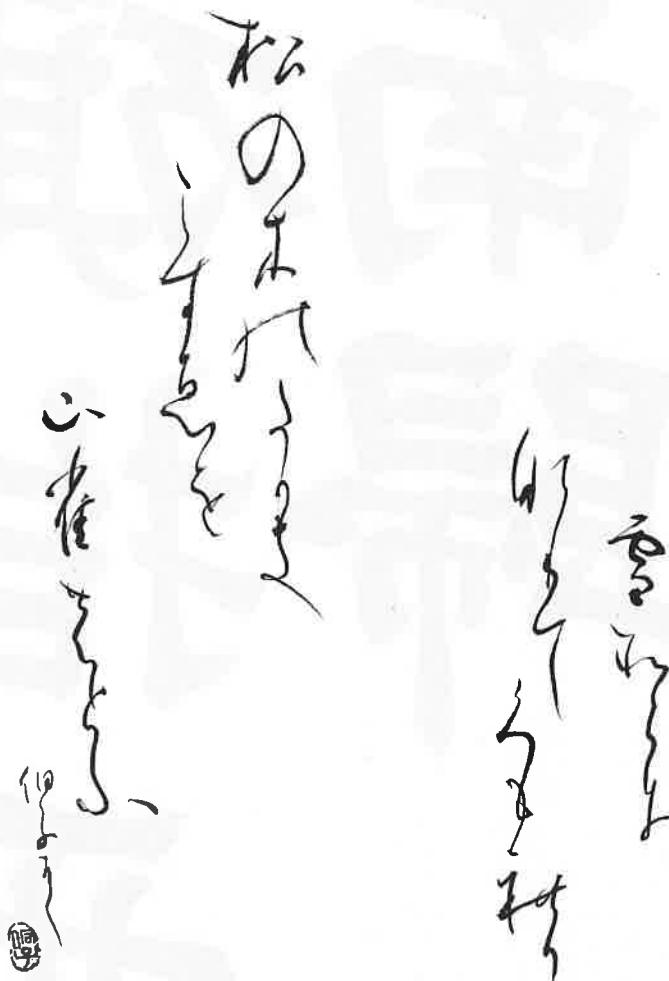
雪ぞらに なりてくもれ
り 松の木の 高き梢を
山雀の飛ぶ

(岡麓)

参考手本

妙位～6位 平井 侗子 書
参考手本 妙位～6位 平井 侗子 書

※かな漢字相互の変換、ちらし自由。落款は〇〇かく+印。



次号課題(予告)
46頁参照

散らしがうるさくならぬような工夫を。名前と印で価値が変わります。



二月五日締切

南画初学講座（九十五）

南画規定

※横三十五センチ、縦二十七センチ（小画仙紙半切五分の二）の用紙を横に揮毫のこと。

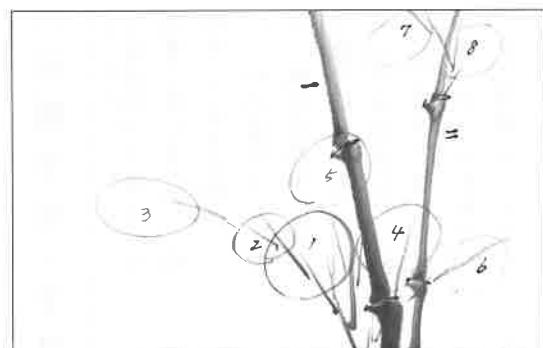
木岡楓月

今回より竹の画法の中の介字竹です。最初に右から出でている二本の竿を描きます。二本の節が揃わないように注意して下さい。葉は前回の基本の時の介字の葉の要領で、四枚を主に、五枚、三枚など組み合わせて描いて下さい。竿が二本以上の時は、濃、淡、肥、瘦の変化が必要です。別図の番号順に葉の大小、濃淡に考慮して描いて下さい。

再度になりますが、使用する用紙は、必ず手漉画仙紙、筆は長流の小を使用する事。

南画は、墨色が重要ですので、洗筆した長流に濃墨をつけて、絵皿でなじませ、墨がなくなるまで描きましょう。

画贊は「清節凌秋」です。



参考 大久保楓紅画



次号課題（予告）

46頁参照

二月五日締切

漢字臨書規定

小画仙紙半切・半紙縦書

参考資料表紙内側

傅山書



玉井菁雪

初名は鼎臣のちに山。字は青竹のち青主。号は石道人、丹崖子など数多く称しました。明朝から清朝へと激動の時代に、前半を明代に、後半を清代に送りますが、明の遺臣としてあくまで清朝に反抗し続け、晩年は郷里において书画三昧の暮らしで生涯を終えます。

傅山は代々学者の家系に生まれました。幼少より才能に秀で、若くして諸学に通じ、道教や仏教にまで造詣が深かつたといわれています。また金石や医学にも精通しています。書においては、魏晋唐の小楷や行草、王羲之や顏真卿など先人の書を広く学んでいます

が、篆隸、楷行草總てに傅山特有の天真さ、奇異さを表すなどは天分というしかありません。

行書五言古詩卷は、二五・四×三三六・八七
ンチの綽本（光沢のある絹）に書かれています。五十二歳にして一子をもうけた喜びを伝えてきた毓青という人物に対し、お祝いに詩を書いて贈つたものです。

傅山（一六〇七—一八四）、山西省太原の人。

玉井菁雪 臨 半切参考手本（上位～六位）

紫雲閣書院
身外代督郵札聲ふ青里

玉井

菁

雪

狂辨

初稿

白鳥翔臨 半紙参考手本（上位～六位）

次号課題（予告）
46頁参照

ん。「拙なるも巧なるなれ、醜なるも媚なるなれ、支離なるも軽滑なるなれ、真率なるも安排なるなれ」と子に教えたとされることはばが傅山の真意を物語っています。

課題は、長条幅などの特有の筆法からは窺えない穂先を利かせた実に爽やかな書です。運腕の大きさ、文字の大小、肥瘦、潤渴など総てが表されています。特に連綿は難しいと感じました。揮毫に当たり墨量に留意され重くならぬよう明快な作品を期待致します。

二月五日締切

か な 臨 書 規 定

卷子本古今集

一一一 半紙縦半切

極位～2位

左を半紙縦半切に臨書すること

(二玄社 日本名筆選㉙ P.17)



やまとくら あくまでいろを みつるかな はなちるべくも かぜふかぬよに

『巻子本古今集』の書風については、連綿の美しさが際立つており、状況に応じて筆線の太さを書き分け、その変化の妙が抜群である、と評されています。課題の歌は、山桜の美しい色を堪能するまで見たことであるよ、と泰平な世を詠んだ一首です。変化のあるやから始まり、すくと立ち佇いは最後の五文字連綿まで流麗さを保ち、その手法は絶妙であり魅力溢れるものです。あととはの一画を思い切った太さで書いて、紙面に明暗をつけ効果的です。二句目のあの線が重なり不鮮明ですがしっかりと見極めて筆を運びましょう。

(星野静代)

3位～6位参考手本 福谷玲子 臨

半紙縦半切に臨書すること



次号課題

(予告)

46頁参照

やまとくら あくまでいろを
みつるかな

ゆく河の流れは絶えずして
しかももとの水にあらず

いかにもものにあります

春長の言文をよしとよべく

ゆく河の流れは絶えずして
しかももとの水にあらず

(鴨 長明)

②半紙規定 タテ

参考手本

片野錦秋書

半紙規定 ヨコ

やはらかに 柳あをめる 北上の 岸邊目に見ゆ
泣けとごとくに

(石川啄木)

条幅規定 タテ 飯山素木書

予告 三月五日締切課題
●半紙・条幅規定 手本参照
●半紙随意 半紙タテとする
●日本文の級位を書くこと。著作権に注意すること。

春の音
うてや鼓の春の音

(島崎藤村)

藤村謹二郎
海雲

ばど
あかるき、
花のや
町はづれ

正岡子規

平岡玲篁書

菜の花や ぱつとあ
かるき 町はづれ

(正岡子規)

河の流れのような人
生。それはかなさをし
みじみと、淡々と……

篆刻入門

(二一五)

益満丁
益
満
丁
益

《応募作品アドバイス》
今月の課題は「風急天高」でした。急が上下の組み合わせ、そのほかは不分割な文字ですが、比較的配置しやすかつたのではないかと思います。

規定参考の天(元)字は玉篇に

見える古文とされる形で、清朝内府の「五福五代堂古稀天子寶」や晚清では徐三庚がこの体を多用しました。恐らく戦国古文の流れを汲む文字であると思われます。

高字は説文小篆では口高(ナベタ)の下が口になつてゐる形ですが、当時の金石資料ではほぼハ

シゴ高(高)になつております。字源的にもこれが正しいようで、説文の高は篆文訛形(写し間違えられた形)であると見られます。しか

し説文に準拠し、口高で刻しても咎められることはありません。

規定

○菅波旭霜さん、刀法が冴えています。印影の風通しも良く、堂々たる刻風です。

○中塚紫雲さん、とても精緻な作となりました。枠(辺縁)の古色の付け方ですが、満遍なく平均的に叩くのではなく、大きく割る部分と細かに欠け

な感じがします。思い切って筆画を枠に割り込ませるか、枠を払つた方が良いでしょう。

○堀流芳さん、いつもながらの漢印調、お見事です。布置も問題ありません。印泥がそろそろ枯れてきたようです。

- 規定「優游」
- 随意(または摹刻を含む)
- 印は3cm以内、摹刻は原印大とします。

○51・52頁応募規定をご覧下さい。
※出品票を貼つたバーコード券を必ず貼付して下さい。



規定参考

益満丁
益
満
丁
益

摹刻参考

林 功太郎

摹刻課題は
「蔡桂私印」
でした。
○林功太
さん、分
違わ
摹
刻、
見
事です。

摹刻課題は
「蔡桂私印」
でした。
○林功太
さん、分
違わ
摹
刻、
見
事です。

優游(ゆうゆう)暇でゆつたりとしたさま。

三月五日締切規定予告
〔樂道閑居〕

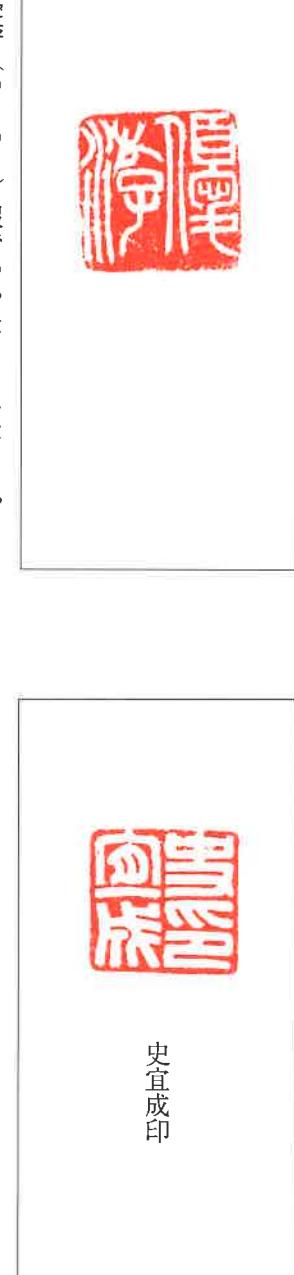


史宜成印



規定参考

益満丁
益
満
丁
益



三月五日締切規定予告
〔樂道閑居〕